掲載日:2024 年 05 月 28 日、北海道新聞社許諾 D2405-2411-00028204

「能登被災地 水道復旧遅れ深刻」

清水赤十字医師ら 現地での体験語る

能登半島地震の教訓を学んだ清水赤十字病院の地域公開講座

【清水】清水赤十字病院の地域公開講座「地震と共に生きる～能登半島地震から学ぶ災害救護と地域での備え」が24日、町ハーモニープラザで開かれ、今年1月24日から3月8日まで3回にわたり現地で救護活動を行った同病院の医師らが災害の教訓を伝えた。

講座には町民ら約60人が参加。珠洲市には1月24日～28日と2月7～12日に医師や看護師らによる救護チーム、金沢市には3月4～8日に災害医療コーディネートチームが派遣された。

珠洲市に派遣された山田圭吾医師は倒壊したまま雪に埋もれた家屋の写真を紹介し、「ここで生活していた人を思うと行く前に心がしんどくなった」と振り返った。2011年の東日本大震災と比べても半島部のため支援が遅れ、水道がいまだに復旧していない地域ではトイレなどで水がないことが一番困ったという。

高橋秀徳薬剤師や成田啓亮臨床工学技士はサポート役の主事としての活動を報告。「多くの業務を負うストレスのせいかふだんより食べる量が増えていた。災害時の非常食としてはビタミンやミネラル、食物繊維が含まれる玄米が入っているもの、さらに食器が要らないものが良い」(成田さん)と話した。

医療コーディネーターとして派遣された藤城貴教院長は道内でも400年周期が既に経過している千島海溝地震に備える必要があると強調。「公助が来るまでの72時間は自助が必要。ポリタンクや電気の要らないポータブルストーブなどの備えを」と訴えた。

(和田年正)